

## 「リトルロックに関する考察」再考

—— アメリカ黒人の文化的伝統に対するアーレントの理解と誤解 ——

大形 綾

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生文明学専攻

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

**要旨** 本論文は、ハンナ・アーレントの「リトルロックに関する考察」の分析を通して、1957年の「リトルロック事件」に対する、彼女の理解と誤解を論ずるものである。これまで多くの研究者たちが「リトルロックに関する考察」を様々に解釈してきた。ある者はアーレントの偏見を、ある者は彼女のドイツ・ユダヤ人としての経験を、ある者は彼女の共和主義思想を記事の中に読みとっている。本論文では、歴史史料を用いてアーレントの記事の再考察を試みる。まず、アーレントが目にしたリトルロックの写真と記事を特定し、当時の公民権運動をめぐる状況に対して、彼女がどのような誤解を抱いていたのかを解明する。次に、アーレントの考察の出発点を理解するために、黒人知識人ラルフ・エリスンに送った私信に注目する。これらの分析を通して、アーレントが「リトルロック事件」に何を見出し、何を訴えようとしたのかを明らかにする。

## はじめに

今日、60年代に花開く公民権運動の分水嶺となった出来事として、リトルロック事件は人々に記憶されている。リトルロック事件とは、1957年9月4日、アメリカ南部のアーカンソー州で黒人生徒が人種統合校に入学した際、白人によって暴動が起こされた事件のことである。この事件は、黒人女生徒が群衆に取り囲まれた出来事を皮切りに、州知事の命令による州兵を用いた登校妨害、それに対する連邦政府の軍隊の投入による暴動鎮圧、そして1958年から1年間行われた公立高校の学校閉鎖へと波及していった。この間、アーカンソー州は全米の注目を集めていた<sup>1)</sup>。

政治学者ハンナ・アーレント (Hannah Arendt, 1906-1975) は、2年後の1959年に、この事件に関する論文を発表した<sup>2)</sup>。「リトルロックに関する考察」(以下「リトルロック」)と題された当論文の中で、彼女は、政府主導で推し進められる人種統合政策が地域住民の合意を欠いたまま行われ

ることに強い疑義を呈している。アーレントの論文が反響を呼んだのは、不用意にも彼女が次のように示唆したことにある——この出来事に関して、人種差別を行っている白人だけでなく、公民権運動を推進している黒人にも問題がある、と<sup>3)</sup>。

当然ながら、アーレントの論文は激しい反発に見舞われた。このことは後に詳しく言及するが、概観すれば次のようなものである。まず、論争的な記事を掲載するか否かをめぐり、アーレントと雑誌編集者の間で度重なるやり取りが行われた<sup>4)</sup>。次に、彼女に対する批判と共に「リトルロック」は雑誌に掲載され、引き続き批判者からの投書と彼女の応答が掲載された<sup>5)</sup>。それは、今日に至るまで黒人差別主義者アーレントというイメージを根強く残し、一部の研究者からの強い反発を生み出している<sup>6)</sup>。

さて、アーレントは本当に黒人に対する人種差別的な偏見を持っていたのだろうか。本論文は、「リトルロック」で描かれることのなかった、アメリカの人種差別問題に対するアーレントの理解と誤解を解明することで、この問題に答えること

を目指している。結論を先取りすれば、「リトルロック」をしてアーレントを黒人差別主義者と評価するのは、不当な判断だと思われる。

まず初めに、ハンナ・アーレントの生涯を簡単に振り返ってみたい<sup>7)</sup>。アーレントは、1906年にドイツの裕福なユダヤ人家庭に生まれ、ナチスの政権掌握と共にフランスに亡命し、抑留キャンプを経て1941年にアメリカに渡っている。彼女は、全体主義体制を論じた『全体主義の起源』をアメリカで出版し、50年代に一躍脚光を浴びることとなる<sup>8)</sup>。その後、『人間の条件』や『イェルサレムのアイヒマン』、『精神の生活』といった著作の執筆を通して、政治から哲学にいたる人間のあり方を幅広く思索した<sup>9)</sup>。

新天地アメリカでの生活が10年に差し掛かろうとする、50年代後半に書かれた「リトルロック」には、アーレントがアメリカ社会に何を見出し・何を見出し損ねていたのかが浮き彫りにされている。「リトルロック」の読者は、歴史的にアメリカが抱えてきた問題について語るアーレントの叙述の中に、彼女のヨーロッパでの経験や思想的な見解と相まった、微妙な緊張関係を読み取ることが出来るだろう。川崎は「リトルロック」を評して、「この論文には、彼女の心情が十分に反映しており」、彼女の理論的な側面と感情的な側面が絡み合っていると指摘した<sup>10)</sup>。川崎の読解に従い、本論では「リトルロック」読解のアプローチとして、彼女を執筆へと向かわせた激しい心情を探求することを試みたい。それは、リトルロック事件に抱いたアーレントの私的な感情を考察する中で、既存の研究とは異なる新たな解釈の可能性を切り拓くためである。加えて、リトルロック事件に対するアーレントの理論と感情の絡み合いに着目したものは、先行研究では未だ十分ではない。

本論文は、まず「リトルロック」におけるアーレントの主張と、先行研究における多様な解釈を確認し、解決されるべき問いを明示する。次に、アーレントが言及したリトルロック事件の記事を検証し、事件に対する彼女の理解と誤解を明らかにする。最後に、彼女が唯一譲歩した批判者に対する私信を用いて、リトルロック事件とその後の

応答から、アーレントが何を学んだのかを解明する。

## 1 「リトルロックに関する考察」とその評価

セイラ・ベンハビブは「ハンナ・アーレントの思想の盲点を最も良く照らし出すエピソードは、もしかしたら学校統合の問題かもしれない」と綴っている<sup>11)</sup>。学校統合の問題とは、前述の通り、アーカンソー州で黒人生徒を人種統合校に通学させる際に生じた、白人によるボイコットの事件である。まずは、「リトルロック」におけるアーレントの主張を確認しながら、雑誌掲載までに辿った、やや複雑な経過を追いかけてみよう。

1957年、「リトルロックに関する考察」というタイトルで、アーレントは事件について記事を執筆した。依頼したのは、雑誌『コメンタリー』の編集者を務める、ノーマン・ポドレッツである。編集者仲間とのエディトリアル・ランチの席上で、リトルロック事件に話が及んだ際、ポドレッツは次のような理由から、アーレントの意見に興味を抱いたという<sup>12)</sup>。

僕自身と、僕が知る誰もがみな、この危機を正真正銘の道徳上の問題と見なしていた。ネグロ（当時僕らは黒人のことをそのように呼んでいた）は道徳的、法律的に正しく、白人は道徳的、法律的に間違っていることを疑問視する者はほとんどいなかった。黒人の子供たちに対してセントラル高校の門扉を閉ざそうとする群衆の間を縫って、彼らの護送のために連邦政府が軍隊を用いることについて、投入される軍の量とタイミングを除いては話し合うべきことは何もないように思われた。それゆえ僕は、ただ一人ハンナだけが、連邦政府の介入を疑問視しているだけでなく、この問題全体に対して全く自由なアプローチをしていることに興味を持った<sup>13)</sup>。

しかしながら、提出されたアーレントの記事は、『コメンタリー』編集部内で激しい議論を生じさ

せた。編集部が困惑させられたのは、次のような理由による。確かにアーレントは、黒人差別が法の下での平等に反する重大な問題であり、法的に定められた人種差別は改正されるべきだと主張している。しかし、彼女は平等概念について独自の見解を有していた。それが編集者から、そして後には多くの読者から、強度の反発を生み出したのだ。

『人間の条件』で展開させた自身の理論的枠組みを、アーレントは「リトルロック」で簡潔に説明している。彼女によれば、人間の生きる世界は政治的領域、社会的領域、私的領域の三領域に区分することができ、それぞれの領域は異なる原則に支配されるという。政治的領域では「平等」が、社会的領域では「区別」が、私的領域では「排他性」が、それぞれの領域を支配する原則である。ある原則が異なる領域へと侵入すると、侵入された領域が破壊されてしまう可能性があるために、アーレントは、三つの領域を明確に区分するよう主張した。具体的には、次のようなことである。

例えば、社会の原則である「区別」が政治的領域に侵入すると、政治において最も重要な「平等」の原則が失われる危険がある。そうなると、人種や出自による不平等選挙が行われる、または特定の人々から被選挙権が剥奪されるといった問題が生じる。もしくは、政治的領域の原則である「平等」が社会的領域に侵入すると、集団や組合を作ることで他の人たちと自分たちを区別する自由が失われ、社会は画一的なものになってしまう。アーレントは、「いかに区別を撤廃するかではなく、どのようにすれば、区別を合法的に社会的領域の内に保っておけるか、そして区別が破壊的な力をもたらす政治的、私的領域への侵入から、いかにして防ぐことができるか」ということをこそ、考えねばならないと強調している<sup>14)</sup>。

この三領域の区分という主張を前提に据えながら、アーレントは、リトルロック事件に特有な三つの問題に鋭く切り込んでいる。

第一に、公立校での人種統合は、人種差別撤廃の緊急の課題として掲げられるべき問いなのか、とアーレントは問いかける。そして、解決されるべき不平等とは、異人種間結婚の禁止法であると主張する。なぜなら、好きな相手と結婚する権利

は「生存、自由、幸福追求権」という「譲渡できない人権」に属する権利であり、それを禁ずる異人種間結婚禁止法は「南部諸州で最も赦しがたい法律」だからである。アーレントは続けて、異人種間結婚禁止法に比べれば、投票権や選挙権といった、政治的な不平等は「二次的」であり、政治的不平等に比べれば、「人種統合校に通う権利、バスで好きな場所に座る権利、ホテルや保養地、娯楽施設に立ち入る権利は、比較的重要ではない」と述べている<sup>15)</sup>。換言すれば、好きな人と結婚する権利を制限する法律こそ第一に公民権運動の達成目標として掲げられるべきであり、次に重要なのは政治に関わる権利の平等、そして最後に、人種統合校に通う権利といった社会的不平等が改正されるべき、というのである。なぜなら「社会的慣習による不平等」に属する、分離校に通うことや娯楽施設での入館制限は、人間の生存や政治に関わる重要事ではないからである。以上のような、教育の問題を社会的問題に分類し、権利に優先順位をつけようとするアーレントの主張には、多くのリベラルな知識人たちから厳しい批判がよせられた<sup>16)</sup>。

第二に、州が定めた教育の方針に連邦政府が介入することは正当化されるのか、それはどのような場合に、いかなる理由で正当化されるのか、とアーレントは問いかける。彼女は、合衆国憲法は教育についての記述がないため、各州が独自の教育方針を持つことが定められていると主張する。とはいえ、義務教育を廃止するような施策を特定の州が定める場合は政府の介入は行われて然るべき、とアーレントは留保を示している。しかし、教育方針の決定は各州に固有の権利であり、アーカンソー州の公立校で人種隔離の政策が行われるからといって、連邦政府が人種統合を強制するのは間違いである、というのが彼女の主張である。というのも、アメリカの政治は「権力の分散」が統治の原則であり、州と連邦政府による権力の「バランスと相互チェック」の制度こそが、共和制を支えるからである。ひとたび政府が州の政策に過剰に介入することを許してしまえば、共和制そのものが崩壊するかもしれない、とアーレントは述べている。そして「この国の州権は(…)共

和制にとって(…)最も真正な力の源泉である」とも綴っている<sup>17)</sup>。州が扱うべき公教育の問題に、連邦政府が上から人種統合政策を押し付けることは憲法違反である、と彼女には思われた。

第三に、公教育における政治的領域、社会的領域、私的領域の重なり合いと、その関係についての問題がある。アーレントによれば、公教育は三つの領域が重なり合う複雑な場所であるという。政府は「未来の市民である子どもたちを育成する」という義務を持つために、教育は政治的領域に関わっている。一方、親は「自らの子どもを育て、教育を受けさせる」という義務を持つために、教育は私的領域と関わっている。さらに、子どもにとって学校は家庭を離れて最初に他人と関わる世界であり、「公的領域で活動するための準備をする空間」の役割を担うために、教育は社会的領域にも関わっている。以上のように、公教育は「基本的人権や基本的政治権」に関わる問題だけでなく、公権力によって「いとも簡単に傷つけられてしまう、社会的権利や私的権利」に属する問題でもあるために、複雑な公教育という場における人種統合の問題から公民権運動が始められることの正当性は、「極めて疑わしい」とアーレントは主張する<sup>18)</sup>。換言すれば、公的領域に比べ、脆く傷つきやすい私的領域や社会的領域にもまたがる公教育以外にも、公民権運動が掲げるべき問題は他にあるのではないかとアーレントは疑問を呈しているのである。上記のような理由から、アーレントは、公教育への政府の介入、および公立校の人種統合政策に、否定的な立場を表明した。

『コメンタリー』の編集部は、「リトルロック」の度重なる掲載延期を検討した<sup>19)</sup>。アメリカ・ユダヤ人委員会の援助の下、リベラルな立場を表明していた『コメンタリー』にとって、彼女の主張は「極めて異端」なものと思われた<sup>20)</sup>。編集部は、一度はニューヨーク大学の哲学教授シドニー・フックにアーレントの記事の批評を依頼し、双方の文章を掲載する形で発表に踏み切ることも試みたが、結局それらの記事を掲載することはなかった<sup>21)</sup>。最終的に、アーレントは論文の取り下げを願い出て、「リトルロック」を抽斗の中に仕舞い込んでしまった。

「リトルロック」執筆から1年以上が経過した1959年の春、社会主義的な雑誌『ディセント』に、短い序文が加筆されて「リトルロック」は掲載された。冒頭には、編集者の次のようなコメントが付されている。

我々は彼女の見解に賛成しているから掲載するのではない。(およそ正反対である!)  
そうではなく、我々は完全に誤りであると思われる見解に対しても、表現の自由を信じるために、この記事に掲載するのである<sup>22)</sup>。

こうした否定的な表明に加え、『ディセント』編集部はアーレントに敵対的な二つの文書を同時掲載した——政治学者デイビッド・スピッツと、社会学者メルヴィン・トゥミンによる反論である<sup>23)</sup>。三か月後、『ディセント』に「批判への返答」と題したアーレントの短い文書が掲載され、読者の投書の中でも、彼女は引き続き答弁を行っている<sup>24)</sup>。

紆余曲折を経て発表された「リトルロック」を、生前、彼女は単行本に集録しなかった。現在、私たちはアーレントの遺稿管理者を務めるジェローム・コーン編纂の『責任と判断』の中で、「リトルロック」の内容を確認することができる。しかし、今日私たちが「リトルロック」を読む際には、編集上の二つの改正点に注意する必要があるだろう。それは、(1)『責任と判断』に収められている「リトルロック」の序文は、アーレントの元の序文とは異なる文章である、ということ。現在『責任と判断』に掲載されている序文の文章は、アーレントによるスピッツとチュミンへの応答である。「批判への返答」の文章が置かれている。(2)雑誌掲載時の「リトルロック」は文章だけの記事であったが、『責任と判断』では、アーレントが言及したとされるリトルロック事件の写真が特定され、文章と共に掲載されている。「リトルロック」を読解する際、読者はこうした編集上の改正点に十分注意する必要がある。

それでは先行研究における評価を確認しよう。

「リトルロック」の解釈は、主に次の3つに分類することができる。

第一の立場は、アーレントが黒人に対する人種差別的な思想を抱いていたとするものである。アン・ノートンは、アーレントの様々な著作に現れる黒人の描かれ方に注目して、彼女が黒人に対して偏見を抱いていたと主張する。ノートンによれば、「アーレントの論ずる世界」とは、黒人たちの政治的運動があたかも「幻想」であるかのような「白い」世界、すなわち白人優位の世界であるという<sup>25)</sup>。近年、キャサリン・ギンズがアーレント思想における黒人問題を分析した著書を発表し、次のような主張を行った。「アーレントの黒人問題に関する主張と態度の根本的な欠陥は、黒人問題を白人の問題としてではなく、黒人の問題として捉えたことにある」<sup>26)</sup>。「リトルロック」は、ギンズの本の中で三章に渡って考察されているが、その評価は非常に辛辣である。ギンズは「アーレントが南部の人種差別主義者と意見を同じくしている、といっても過言ではない」とまで綴っている<sup>27)</sup>。「リトルロック」を黒人と白人の人種対立という構図から解釈しようとするこの見解は、アーレントと「リトルロック」に対する最も否定的な立場といえるだろう。

第二の立場は、それとは対照的に、「リトルロック」を建設的に批判しようとするものである。この立場は「リトルロック」に対する批判をある程度認めながらも、アーレントがなぜ物議を醸すような主張を行ったのかを考察する。ベンハビブとエリザベス・ヤング＝ブルーエルは、「リトルロック」の判断の根底には、ドイツにおけるアーレントの反ユダヤ主義体験が存在していると主張した。ブルーエルは、彼女のユダヤ人の生き方に対する「自覚的賤民」「成り上がり者」という考え方が、歴史も文脈も異なる黒人にあてはめられたことで、一見人種差別的とも思われる主張が行われたと論じている<sup>28)</sup>。この「自覚的賤民」「成り上がり者」という類型は、要約すれば次のようなものである。

「成り上がり者」とは、少数派として生まれついた自らの出自を否定して、社会の多数派に同化し受け入れられることを熱望する生き方であるが、それは人を自己欺瞞に陥れる罠でもあるという。対する「自覚的賤民」とは、「成り上がり者」の

ように自己の出自を隠匿するのではなく、むしろ迫害や差別の対象となる要素を積極的に開示することで、苦しいながらも自己欺瞞を避けようとする生き方である<sup>29)</sup>。アーレントは、生涯を通して、後者の生き方を体現するよう努めた。ベンハビブは、アーレントは「リトルロック」の中で黒人の置かれている状況を理解しようと試みたが、「彼女自身の歴史とアイデンティティーを他者に投影してしまった」と解釈している<sup>30)</sup>。アーレントが繰り返し立ち帰ったユダヤ人経験のなかに、「リトルロック」の主張の根源を見出そうとするのが、この立場である。

第三の立場は、「リトルロック」の中に人種問題を見出すのではなく、アーレントがアメリカ社会に理想的に見出した、共和主義の理念を読み取ろうとするものである。この研究者たちは、「リトルロック」には、政治的領域の原則である平等と、共和制の原則である多様性を、いかにして擦り合わせるか、という問いが存在していたと考える。例えばリチャード・キングは、ジェームズ・ボーマンの解釈に依拠しながら、「平等と多様性の間の緊張関係が、『リトルロック』を貫く重要な考え方である」と主張している<sup>31)</sup>。また、マーガレット・カノヴァンは、「リトルロック」でアーレントが主張したのは、「平等な市民権と社会的同質性とを区別すること」であると強調した<sup>32)</sup>。政府による州への強制を出来る限り排除して、「平等」を原則とする政治的領域の中に「区別」を原則とする社会的領域の要請——すなわち、多文化主義の要請——をいかにして擦り合わせてゆくの、これこそがアーレントが提起した問いであると解釈するのである。

以上の人種対立、ユダヤ人経験、共和主義という見解は、三者三様に示唆に富む論点であり、そのどれもがアーレントが生涯をかけて考え続けた重要な問いである。しかし、次の一文を見落とすべきではない。それは、「明確にしておかねばならないのは、ユダヤ人として黒人の主張に共感を覚えるのと同様に、私は恵まれない、抑圧された人々にも共感を覚える」という、アーレントの心情が珍しく吐露された一文である<sup>33)</sup>。

前述したように、「リトルロック」はアーレン

トの理論と心情が共存した、特異な論文である。アーレントが、この事件に関する何の記事を見て、事件をどのように理解し、または理解し損ねたのかを解明することは、彼女の感情を読み解く鍵となるかもしれない。黒人への行き過ぎた叙述に対する解釈を、モーレーやギンズに倣って人種差別的偏見にあると理解する以外に、アーレントの心情を解釈する術はないのだろうか。

私は、リトルロック事件について執筆していた時、アーレントは2つの強い感情に動機づけられていたのではないかと考えている。一つは、望まない状況に放り込まれて、厳しい試練を引き受ける黒人生徒への共感である。もう一つは、危険な場所に子供を送り込み、それを黙って看過した大人たちへの道徳的怒りである。前者については、前川玲子とマリベル・モーレーによってすでに指摘がなされている。前川は、アーレントが黒人生徒と共に「自分も侮辱されているという体験をしているかのように反応している」と「リトルロック」を解釈した<sup>34)</sup>。モーレーは「リトルロック」を解釈して、子どもの生活を公的世界から保護することこそが、アーレントの意図であったと論じている<sup>35)</sup>。こうした解釈は、当時のアーレントの立場に研究者が近接した結果、引き出される見解であろう。ここから、前川やモーレーに倣って彼らの立場を受け継ぎながら、アーレントが黒人の大人たちに対する道徳的怒りを抱いていた、という後者の仮説を検証してみたい。その際、アーレントが目にした写真と記事を探し出し、そこに描かれた記述と写真の分析を行うことで、私たちは彼女の「リトルロック」執筆の出発点に立ち会うことになるだろう。

それでは、1957年9月4日のリトルロック事件を振り返ってみよう。

## 2 「父親の白人の友人」をめぐる謎

1957年9月4日、アメリカのアーカンソー州リトルロックで、人種統合校であるセントラル高校に入学を許可された1人の黒人生徒が、白人群衆に囲まれて、やむなく登校を諦めた。その時撮影された写真は、アメリカ全土と世界に強い衝撃

を与えた。写真の黒人少女、エリザベス・エックフォードは、人種共学を始めたばかりのセントラル高校へと転学した、9人の黒人生徒の1人である。

全国黒人地位向上委員会 (NAACP) の支部局長であるデージー・ベイツは、前夜に転学予定の生徒たちの家に電話をかけ、4日は集団登校をするよう連絡した。しかし、家に電話がなかったエリザベスに通知が知らされることはなく、当日彼女はバスに乗ってセントラル高校へと登校し、たった1人で群衆に直面させられることとなった。エリザベスは、背後から押し寄せる白人群衆と、自分を守ってくれると思っていた州兵に登校を押しとどめられ、恐怖のあまりその日は引き返すことを決意した。一人の勇敢な白人女性の助けを借りて、彼女は戦闘地帯から脱出した<sup>36)</sup>。

ここで、『責任と判断』に集録された、「リトルロック」の冒頭を飾る写真(図1)に目を向けてみよう。写真の白いドレスを着た黒人少女エリザベスは、スーツに身を包んだ4人の白人男性に囲まれている。彼らの背後から、白人たちが険しい表情で少女の姿を睨みつけている。アーレントは、「リトルロック」の本文と「批判への返答」の中で、自身が目にしたショッキングな写真のことを、二度に渡って描写した。

まず、本文には次のように書かれている。

全米中の新聞や雑誌で複製された、あの写真を忘れることは、誰にとっても容易ではな



図1 アーカンソー州のエリザベス・エックフォード

いだろう。野次をとばし、しかめ面を向ける若者の群衆に身体のすぐそばまで付きまわれ、虐げられた黒人少女を写した写真のことを、彼女は、父親の白人の友人に付き添われて、学校から立ち去ろうとしている。少女は明らかに、英雄であることを求められていた——いわば、そこにいない彼女の父親も、同様に姿の見えない NAACP の代表も、求められているとは感じていない、英雄か何かになることを（強調引用者）<sup>37)</sup>。

アーレントが忘れ難く記憶している写真とは、エリザベスに「寄り添う (accompanied by)」「父親の白人の友人 (a white friend of her father)」が映し出されたものである。これと全く同じ表現は、「批判への返答」の中でも繰り返されている。

私の考察の出発点は、新設の人種統合校から家に引き返す黒人少女を撮影した、新聞掲載の一枚の写真だった。彼女は白人の子どもの群衆に虐げられ、父親の白人の友人に守られていたが、その表情は、彼女が正しくも幸福ではないという、明らかな事実を雄弁に物語っていた。その写真は、事態を極めて簡潔に表現していた（強調引用者）<sup>38)</sup>。

ここでも、エリザベスの傍らには「父親の白人の友人」が存在しており、彼女はその友人によって、白人生徒たちから「守られていた (protected)」と記述されている。

さて、事件の当日エリザベスに「寄り添い」、彼女を群衆から「守った」エリザベスの「父親の白人の友人」とは誰だろう。リトルロック事件の史料を目にすれば、その人物の特定は不可能であることが分かる。なぜなら、実際には「学校側が両親に付き添わないよう要求していた」ために、エリザベスはその日「たった一人、誰の警護もなく」学校へ向かっていたからである<sup>39)</sup>。黒人少女の傍らには、アーレントが記述した「父親の白人の友人」にあたる人物は、存在していなかった。

『責任と判断』の翻訳者である中山は、訳註の中で、写真の男性はベンジャミン・ファインでは

ないかと指摘している<sup>40)</sup>。ニューヨーク・タイムズ紙の教育欄担当記者を務めていたファインは、ショックを受けて家に引き返そうとするエリザベスを抱きかかえ、「彼らに泣き顔を見せてはいけないよ」と声をかけたと伝えられている<sup>41)</sup>。なるほど、写真の白人男性はスーツ姿で、カメラを抱えた仲間らしき男性たちと同様、記者のような身なりをしている。他にも「全米中の新聞や雑誌で複製された」というアーレントの記述からは、彼女の目にした写真はリトルロック事件を代表する有名なものと思われるが、『責任と判断』に載せられた写真は「あまり見かけない一枚」でもある<sup>42)</sup>。加えて、エリザベスを取り囲んでいるのは「若者の群衆 (mob of youngsters)」や「白人の子どもの群れ (mob of white children)」であるというアーレントの記述に反して、写真の後方に映る白人群衆は、大人たちのようである。

アーレントが目にしてきた写真をめぐって、研究者たちは様々な見解を提示した。例えば、アーレントの生涯を網羅的に調査したブルーエルは、『ライフ』に掲載された写真であると綴っている<sup>43)</sup>。モーレーは、リトルロック事件で最も有名な、白いドレスを着た白人少女、ヘイゼル・ブライアントがエリザベスの背後から何事かを叫んでいる写真だと指摘する<sup>44)</sup>。そして、ダニエル・アレンとキャサリン・ギンズの二人は、1957年9月5日の『ニューヨーク・タイムズ』の一面に掲載された、一枚の写真ではないかと推察している<sup>45)</sup>。二人の推測が興味深いのは、アーレントが描写したのはエリザベスの写真ではなく、同日ノース・カロライナ州のハーディング高校に入学した、ドロシー・カウンツの写真（図2）であり、アーレントは彼女をエリザベスと取り違えていことを指摘している点である。

この日、『ニューヨーク・タイムズ』の一面には、学校統合に関わる写真が二枚並んで掲載された。一枚は、兵士に入校を押しとどめられるエリザベスと、彼女の背後で何食わぬ顔をして学校に向かう白人少女を写した写真、もう一枚は、大勢の若者に囲まれて野次とからかいを受けながらも、毅然とした表情で登校するドロシーの写真である。

アーカンソー州とノース・カロライナ州の二つ



図2 ノース・カロライナ州のドロシー・カウンツ

の州で、9月4日に黒人の生徒が人種統合校へと入学し、両者ともに白人住民からの反発を生み出した。しかし、知事の命令によって州兵が出動し、黒人少女の入学が拳銃を用いて妨害されたアーカンソー州のリトルロック事件は、ノース・カロライナ州の出来事よりも人々の耳目を引いていた。事実、その後の新聞や雑誌が繰り返し取り上げたのはリトルロック事件の方であり、ノース・カロライナ州の出来事はあまりメディアを賑わすことはなかった。

ドロシーの写真をもう一度見てみよう。ドロシーの背後には、彼女をやじる若者たちの姿が映し出されている。注目すべきは、白いシャツを着て彼女の右隣りに立つ、厳しい表情の男性の姿である。キャプションを見ると、次のように書かれている——「エドウィン・トンプキンス博士に守られて (escorted) ハーディング高校へと向かうドロシー・カウンツを、生徒の群れが追いかけている。彼女はこの学校に出席した最初の黒人生徒である (強調引用者)」<sup>46)</sup>。トンプキンス博士は、同新聞の20面で、再度記述されている。「ドロシーは、彼女の父親の友人 (a friend of her father) であり神学校の教職員でもあるエドウィン・トンプキンス博士に付き添われて (accompanied by)、徒歩で登校してきた (強調引用者)」<sup>47)</sup>。

『責任と判断』冒頭の写真 (図1) は、アーレントが綴った、エリザベスを「守る」「父親の友人の白人」という記述から特定されたものであろう。しかし、『ニューヨーク・タイムズ』の誌面

の写真 (図2) に写しだされたショッキングな光景と、記事の描写にある「父親の友人」という一文からは、やはり、アーレントは『ニューヨーク・タイムズ』のドロシーの写真の誤って描写したと思われる<sup>48)</sup>。

ギンズは、アーレントが2つの写真を取り違えたことを、彼女の黒人に対する誤解によると解釈した<sup>49)</sup>。アーレントが黒人に対して人種的偏見を抱いていたことを繰り返しギンズは強調するが、それでは先述した「ユダヤ人として黒人の主張に共感を覚えるのと同様に、私は恵まれない、抑圧された人々にも共感を覚える」という一文はどう解釈するのか。また、アーレントが目にした写真も、ドロシーのものであると断定することはできるのだろうか。これから、エリザベスとドロシーの写真をアーレントが取り違えて描写した、というアレンとギンズの見解を再検討してみよう。

まずは、ギンズがアーレントの誤解をどのように解釈しているのかを確認したい。

アーレントは、この写真の中にドロシーが目にしたものを見ていない。アーレントは〔状況を〕理解しようとしていない。むしろ、すでに理解したと考えている。彼女は、どのように見、いかに判断するかには好ましからざる影響を及ぼす、前もって出来上がっている仮説によって、写真を眺めているのである。アーレントは黒人の両親と NAACP に対して最初から心を決めてしまっている。つまり、黒人は怠慢で、楽観的で、連邦政府によって押し付けられた公立校の統合を通して、社会的上昇を求めている、と、リトルロック事件とその写真は、彼女の理解のための出発点ではなく、既存の判断を再確認するためのものとして扱われている<sup>50)</sup>。

ギンズは、社会的な地位の向上を目指す黒人の大人たちによって、子どもたちが政治的に利用された、というアーレントの解釈に困惑している。そして、そうした主張が為された背景には、そもそもアーレントが人種差別的な偏見を有していたからだと結論づける。彼女によれば、アーレント

の偏見は、子どもたちを心配する黒人の親についての記事の記述を見過ごさせ、また、「父親の友人」とだけ書かれていたトンプキンス博士に、書かれてもいない「白人の」という形容詞を書き加えさせるほどだった、という<sup>51)</sup>。アーレントの事実の誤認は、白人の人種差別主義者と黒人差別意識を共有していた証である、というのがギンズの「リトルロック」解釈である。

しかし、2つの写真と記事をアーレントが偏見から取り違えた、というギンズの仮説は、次の点において矛盾している。つまり、アーレントは黒人少女の向かう先がどこであったかという点においては、正しくエリザベスの姿を描写していたのである。

アーレントが目にした写真の黒人少女は、「学校から立ち去ろうとしている (walking away from school)」途中であり、彼女は「新設の人種統合校から家に引き返す (on her way home)」最中であつたという<sup>52)</sup>。少女は、登校を諦めて家路につこうとしていた。しかし、ドロシーの写真のキャプションには、「ハーディング高校へと付き添われる (escorted to Harding High school) ドロシー・カウッツ」と書かれており、彼女は「徒歩で登校してきた (came to school)」と書かれている<sup>53)</sup>。その日、エリザベスは登校することができずに家に引き返したのに対し、ドロシーはトンプキンス博士に付き添われて学校に向かい、無事に入学することができた。

『ニューヨーク・タイムズ』に掲載されたエリザベスの記事に、再び目を向けてみよう。

少女がゆっくりと出口へと歩いてゆくと、群衆があざけり、叫び声をあげながら彼女を取り囲んだ…黒人少女はバスのベンチに座り込んだ。彼女はショック状態のように見えた。グレイス・ローチという一人の白人女性が、彼女を慰めるために歩いてきた…彼女〔ローチ〕は黒人生徒を道の反対側へと保護したが、群衆は後をついてきた<sup>54)</sup>。

エリザベスは、「ゆっくりと出口へ歩いて行った (walked slowly toward the exit)」。彼女の傍らに

父親の友人はいなかったが、「白人の女性」(a white woman) が寄り添っており、彼女がエリザベスを「保護していた (escorted)」という。

以上の点から、次のように考えたい。つまり、アーレントはエリザベスとドロシーの二人の写真を取り違えたというよりは、二人の写真と記事を混合していた。事件の当日、ドロシーには「(黒人の) 父親の友人」が連れ添っており、エリザベスの傍らには「白人の女性」が存在していたのである。それでは、アーレントが黒人少女を守った人物に対して、「父親の『白人の』友人」と筆を滑らせてしまった原因は、人種差別的な偏見以外にどのような解釈が導き出せるだろうか。

2つの記事と写真に対するアーレントの誤解と混同から、次のように推察することができる。それは、アーレントは新聞を傍らに置きつぶさに状況を確認しながら「リトルロック」を書いたのではなく、2つの事件にまつわる報道にショックを受けた彼女は、大人への怒りと子供への共感という感情に飲まれたまま、記憶を頼りに「リトルロック」を執筆した、というものである。リトルロック事件に対するアーレントの誤解は、次の2点にあつたと考えられる。(1) 黒人の少女は「望んでもいない」統合校に強制的に通学させられた。(2) 黒人の大人や NAACP のメンバーは、白人群衆の中に子どもをたった一人で送り出しておきながら、無責任にも自分たちは表舞台に姿を現すことを拒否した。

アーレントにとって、大人の無責任な態度は許しがたいことであつたに違いない。事実、「リトルロック」の中で、彼女は人種統合が公立校から始められたことは、「黒人と白人の双方の子どもたちは、何世代もの間大人が解決できないと告白している問題に取り組む、という大きな負担を負わされた」とも綴っている<sup>55)</sup>。

「リトルロック」を執筆した時にアーレントを突き動かした感情は、人種差別的な偏見というよりは、大人たちの保護を必要とし、安全な場所で生活を送るべき子どもたちを政治的な闘争に放り込み、彼らを利用して公民権運動を推進しようとする、大人たちのエゴに対する道徳的な怒りだったのだろう。黒人の大人たちは、子供を保護する

義務を無責任にも放棄し、子どもたちを危険な状況に曝している——これが、アーレントのリトルロック事件に対する理解であると思われる。つまり人種的な偏見ではなく、黒人の大人に対する道徳的怒りこそが、彼女に事実の理解を歪めさせたのである。

アーレントを非難する声は次第に小さくなってゆき、論争は時と共に収束した。しかし数年後、彼女は思わぬ形でリトルロックについて再び言及することになる。とはいえ、それは雑誌に掲載されるような公的文書の形ではなく、友人に宛てた私的な応答として、ひっそりと囁かれたにすぎなかった。

### 3 ラルフ・エリスンへの私信

ここから、黒人小説家ラルフ・エリスンに宛てたアーレントの私信を確認し、数々の批判の中で、彼女が唯一エリスンにのみ譲歩した理由を考えたい。ここでエリスンは、黒人コミュニティーに存在する、隠された「信条」の存在をアーレントに伝えたが、彼の指摘は、アーレントにどのような影響を与えたのだろうか。

アーレントが、大人たちへの道徳的な怒りの感情からリトルロック事件を過って理解し、リベラル派の人々から不評を買っていた1959年から4年後の1963年、彼女は二度目の論争に巻き込まれた。ユダヤ人を収容所に送り込む仕事を担当していた、ナチスの官僚アドルフ・アイヒマンの裁判を傍聴したアーレントは、『イェルサレムのアイヒマン』を執筆し、今度は世界中のユダヤ人から非難を浴びた<sup>56)</sup>。彼女の生涯で二度目の、そして最大の論争の真っ最中である1965年6月29日、アーレントはとある黒人知識人に対して手紙を書き送っている<sup>57)</sup>。手紙の相手であるラルフ・エリスンについて、簡単に彼の生涯を振り返っておこう。アメリカ南部のオクラホマ州オクラホマ市に生まれたエリスンは、3歳で父親と死別し、貧しい家計を助けるために様々なアルバイトをしながら少年時代を過ごしていた。青年となったエリスンは、由緒ある黒人大学であるタスキーギー大で音楽を勉強し、在学中に読んだT・S・エリオッ

トに感銘を受けて創作活動を始める。しかし、母親の死をきっかけに、様々な場所へ移り住みながら労働に従事するようになり、32歳の時に発表した、処女作『見えない人間』が大きな成功をおさめ、世界に知られる黒人小説家となった<sup>58)</sup>。

ここでやや脇道にそれるのだが、エリスンの代表作である『見えない人間』の概略を確認しておきたい。黒人少年の語り手である「僕」は、奨学金を得て南部の黒人大学に通うことになったが、とある事件に巻き込まれ、大学を追われニューヨークへとやってくる。「僕」は、ニューヨークで運よくペンキ製造工場に職を見つけるが、短期間で解雇され、ハーレムで出会った黒人支援の政治団体から仲間になるよう勧誘される。その後しばらく、「僕」は政治団体の演説者として活動するが、党の方針に失望して組織から離れ、最後はハーレムで生じた暴動に巻き込まれて、マンホールから地下深くに落ちてしまう。語り手である「僕」は現在、穴倉のような廃墟ビルの地下室に潜伏しながら自分の生涯を振り返っている、という物語である。

この物語が興味深いのは、語り手の「僕」が、その時々身に寄せる白人グループや黒人グループから利用され続け、最終的には追い出されてしまうという出来事が、何度も何度も繰り返されることである。「僕」は、受け入れてくれた仲間たちと、なんとか良い関係を築こう、なんとかその居場所に受け入れられようと努力を重ねるのだが、結局は相手の欺瞞に気が付き、搾取されているだけの自分の存在に嫌気がさして、別の居場所へと逃れてゆく。語り手の「僕」は、白人社会に同化して媚びへつらう生き方には我慢ができないが、かといって黒人のアイデンティティーを強く打ち出し、あくまで黒人という人種の独自性にこだわることも納得できない。そうして、奇妙な人々で溢れる悪夢のようなニューヨークの摩天楼を、行くあてもなく彷徨い続ける。彼は自分自身に、「僕」は何なのか、「僕」は何になれるのか、「僕」は誰なのか、と切実に問いかけている。

この本のタイトルである『見えない人間』とは、1つの人格を持った人間である語り手が、「黒人」という類型に囚われてしまうことで、周囲の誰も、

語り手「自身」や語り手「個人」を見ようとしなかったこと、そしてまた、語り手自身も、自分「自身」や自分の「個性」を見出すことに失敗してきたことを示唆している。「見えない人間」とは、他人から一つの人格を持った人間として眼に映らないだけでなく、自分からも統一的な人格を持った人間として認識されることがない、二重の意味で「見えない」、もしくは「見失われた」存在なのである。

さて、エリスンの小説の主題は、アーレントが描く、あまりにも強く同化を願うあまり、他人からも自分からも統一的な自己が見失われてしまう、亡命者の悲痛な境遇を綴った「われら亡命者たち」の語り口とよく似ている<sup>59)</sup>。さらに言えば、この主題は「リトルロック」における、黒人少女へのアーレントの叙述とも通底しているように思われる。

前述したように、「リトルロック」を執筆する際のアーレントの「考察の出発点」は、新聞や雑誌に掲載された、黒人少女の写真を目にしたことであった。アーレントは続けて、写真の少女の表情は、全く幸せそうには見えなかった、と述べている。なぜなら、少女は「個人の誇り (personal pride)」を傷つけられているためである。

個人の誇りに関わるために、心理学的には、[自身の存在が他者から] 望まれていないという状況 (これは典型的な社会的苦境である) は、公然とした迫害 (これは政治的な苦境である) よりも耐えがたい。(…) [個人の誇りとは]、出生の偶然性によって生みだされた、アイデンティティーに対する、教えられたわけではないが自然な感情のことであり [補足は引用者]<sup>60)</sup>。

出生の偶然性によって人間に付与されるのは、例えば、人種、国、性別、宗教、階級、経済状況、言語といった、一人の人間を形作る要素である。こうした要素を、新しく生まれてくる者たちは選ぶことができない。そのため、新たに生まれた者たちは、それらの要素を所与のものとして受け止めなければならない、とアーレントは考える。

「誇りは (… ) 個人の一体感に欠かせないものであり、それは迫害からというよりは、むしろある集団から追い出されて、別の集団に入れられることによって、正確には追い出されるよう駆り立てられることによって、失われる」<sup>61)</sup>。同じ学校に通う白人の子どもたちから、「あなたの存在は不必要である」というメッセージを、野次やからかいと共に背後から浴びせかけられる黒人少女の苦しみは、生まれ持って与えられた個人の人格が、バラバラに引き裂かれる「耐えがたい」苦しみに違いない。とりわけ、それが自分自身の決断によって課せられた苦痛ではなく、社会的な圧力によって背負わされた責苦であった場合には、その重圧に耐えるのは並大抵のことではない。

とはいえ、「リトルロック」の記事の中で、アーレントは次のようにも綴っている。「人生は非常に不愉快になるかもしれないが、私に押し付けられたものが何であれ (… ) 単なる社会的な理由ではなく、幾つかの極めて重要な必然性によって、強制されて行動する限りにおいて、確かに私は人格的な一体感を持ち続けることができる」<sup>62)</sup>。例え強制されたものであっても、それが本人にも納得できる強制であり、社会的な理由による強制でないのであれば、個人の人格は一つの統一体を維持することができるというのである。ここで思い出されるのは、ユダヤ人と非ユダヤ人の結婚が禁止されていたドイツにおいて、非ユダヤ人の夫ハインリヒ・ブリュッヒャーとの結婚を決断した、アーレント自身の経験である。アーレントは、社会的タブーである非ユダヤ人との結婚を決断することで、自ら試練を引き受けた。この決断から、アーレント夫婦は多くの苦難に見舞われたが、自分と相手の幸福を求めて下したこの決断により、自分自身を見失うことからは守られた、と先の記述は仄めかしているようである。ブルーエルもベンハビブも、「リトルロック」の中でアーレントが繰り返し、異人種間結婚の禁止法こそがまづもって達成すべき目標であると主張したのは、彼女自身の経験が踏まえられている点を指摘している<sup>63)</sup>。

注目すべきは次の事実である。「リトルロック」が論争を生じさせていた頃、アーレントの見解に

反対した人々の多くが、彼女の政治的領域、社会的領域、私的領域の分離という主張を集中的に批判した。しかし、エリスンだけは異なる観点から反論を述べ、彼の見解に対してのみ、アーレントは譲歩の姿勢を示している。なぜ、アーレントはエリスンにのみ譲歩したのだろうか。

エリスンによるアーレントへの反論とは、1965年に刊行された『誰がネグロについて語るのか?』に収められた、インタビューでの応答を指している。

いずれにせよ、このことはアメリカの黒人経験の一部でもありますし、また私は、黒人の経験の中にある意味を知るための重要な手掛かりの一つは、犠牲の理念 (ideal of sacrifice) という考え方だと信じています。ハンナ・アーレントが、南部黒人の持つこの理念の重要性を理解し損ねたことは、彼女の「リトルロックに関する考察」を奇妙な誤解へと陥らせました。彼女は、学校統合の抗争の間、黒人の親たちが子どもを利用してたと非難したのです。しかしアーレントは、敵意に満ちた人々の群れの中へ子どもたちを送り出す時、黒人の親の心の中に何が生じているのか全く分かっていないのです。黒人の親たちは、全ての神秘がはぎとられた社会的生活の恐怖に直面するという、この出来事が子どもたちに対して実際に持つ、通過儀礼としての意味合いを承知しています。そして(問題が生じぬようにと願う)これらの親たちの多くの見通しの中では、子どもがまさにアメリカの黒人であるという理由から、テロルに直面し、恐れや怒りを自制すると考えられているのです。従って、黒人は人種をとり囲んでいる状況によって生み出された、内的緊張を乗り越えることを求められているのであり、もし怪我を負ったなら——その怪我は、もう一つ重ねられた犠牲なのです。これは苛酷な要求ですが、この基本的な試練に失敗したなら、子どもの人生は更に厳しいものとなるでしょう(強調原文)<sup>64)</sup>。

エリスンは、黒人の文化的伝統に対するアーレントの誤解を指摘した。それは、リトルロック事件が生じた時に、黒人の親たちが子どもを利用し、自分たちは戦いの背後で身を隠していたのではない、という指摘である。実際には、黒人の親たちは子どものことを十分に気遣い、子どもがどのような目に会うのかを理解し想像をめぐらした上で、それでも白人の群衆の中に送り出すことを決断したのである<sup>65)</sup>。エリスンの言葉を借りれば、リトルロック事件によって全米の人々の目に写し込まれた光景は、黒人たちが伝統的に引き受けてきた「通過儀礼」の様子だった。黒人の子供たちは、アメリカ社会の中で決して注目を集めることはなかったが、黒人社会の伝統として秘かに受け継がれてきた「通過儀礼」を潜り抜けるときの恐怖と暴力を、事件の当時、自発的に引き受けていたのである。黒人の子どもたちが望まぬ統合校に無理矢理通わされた、というアーレントの叙述は間違っていた。エリザベスを含めたリトルロックの9人の黒人生徒は皆、親の反対を押し切って、自ら転学を申し出た子どもたちだったのである<sup>66)</sup>。

『誰がネグロについて語るのか?』を読んでいた時、エリスンの指摘を「偶然目にした」アーレントは、「あなたは全く正しいです」と素直に自身の誤りを認める手紙を書き送っている<sup>67)</sup>。タイプ草稿で一枚だけのエリスン宛ての手紙には、彼の指摘によって、自分は何を誤解していたのか、何を理解できていなかったのかが明確になった、と記されている。いわく、「私が理解できなかったのは、まさにその『犠牲の理念』です。そして、私の〔考察の〕出発点は、強制的な統合校での、黒人の子どもたちの状況を検討することであったために、その理解を失敗したことは、私を確かに、完全に誤った結論へと陥らせました」<sup>68)</sup>。

エリスンの指摘によりアーレントが理解したことは、アメリカの黒人たちが長い間伝統的に引き受けてきた、社会生活におけるむき出しの暴力や憎悪と向き合い、それを引き受け耐え忍ぶという、「犠牲の理念」の信条が、黒人たちの間に存在したという事実である。そして、エリスンの指摘を読んだ時、彼女は「単純に状況の複雑さを理解していなかった」ということが分かった、と

アーレントは告白している<sup>69)</sup>。

アーレントが理解することができなかつたのは、雑誌や新聞に決して取り上げられることはなかつたが、黒人たちの間で脈々と受け継がれてきた、「犠牲の理念」という文化的伝統であった。アーレントは、かつて、「隠された伝統」と呼ばれる生き方がユダヤ人存在することを書き綴ったが、黒人にも同様な信条が存在することを、彼女は勿論知る由もなかつた<sup>70)</sup>。黒人の持つ「犠牲の理念」という信条は、彼らの人格を、苛酷な状況下で引き裂かれることなく、統一体として守る役割を果たしていたのである。インタビューでのエリスンの指摘は、アーレントの黒人に対する人種観に新しい理解を生み出し、ユダヤ人とは異なる人格的統一を守るための独自の方法を、彼女に示したのではないだろうか。

エリスンがインタビューで指摘したこと——アメリカの黒人たちは、長い時間の中で、彼らなりの方法で白人優位の社会に抵抗し、自分たちの独自性を守ってきたこと、アメリカにおいては少数派グループがそれぞれ異なる方法で画一化に対抗し、危機に曝されながらも伝統的に多様性を守ってきた、という事実——は、国家の中で、少数派グループが独自性を保ちつつも存在するための方策の一形態を、アーレントに示唆したのかもしれない。それは、迫害された者たちが、口をつぐんで犠牲の伝統を引き受けるにせよ、賤民という出自を高らかに叫ぶにせよ、偶然に生まれついた自らの状況を否定するのではなく、ありのままを受け止めることで、少なくとも、個人の人格的統一性を見失わずにすむという、運命の受け止め方だったのかもしれない。

#### 4 おわりに

最後に、「リトルロック」においてアーレントはどのようにして人種差別的とも取れる見解を行ったのか、という最初の問いに立ち返ってみよう。本論文は、この問題に答えるために、3つの観点から考察を行ってきた。その答えは、次のようなものである。

まず、「リトルロック」をめぐる研究者たちの

解釈の分類を通して、問題の所在はどこにあるのかを確認した。「リトルロック」に対する評価は、換言すれば、次の3点に集約される。(1) アーレントの黒人に対する人種的偏見に問題があるとみなすもの。(2) アーレントのユダヤ人経験に解釈の根源を見出すもの。(3) アーレントの共和主義的思想を読み込もうとするもの。こうした異なる解釈が生じた背景には、リトルロック事件に対するアーレントの考察に含まれる「感情」が見落とされてきたという問題がある。ここから、アーレントが「リトルロック事件をどのように理解し、何を考えたのか」と問うことで、多様な解釈が存在する「リトルロック」の読解に、一つの解決策を提示できるのではないかと考えた。

次に、アーレントのリトルロック事件に対する理解を再検討するために、彼女が目にしたリトルロック事件の写真と記事の特定を行った。アレンとギンズが指摘しているように、アーレントが描写したのはエリザベスのものではなくドロシーの写真だと思われる。しかし、そこからアーレントが白人優位の人種思想を抱いていたと結論付けることは妥当ではないだろう。「リトルロック」を注意深く読めば、アーレントが単純にエリザベスとドロシーの写真と記事を取り違えていたのではなく、別の点——黒人少女が学校に「向かっていた」のか「引き返していた」のかという行き先の相違——にも気づくはずである。アーレントの事実誤認から、黒人の大人たちに対する怒りを読みとることはできても、人種差別的な偏見まで読み取ることは不可能である。

最後に、アーレントが批判者であるエリスンになぜ唯一譲歩の姿勢を示したのか、という問いを考察した。エリスンが示唆したのは、アメリカ社会で黒人たちが守ってきた伝統的な信条であり、リトルロック事件の中で、黒人の大人も子供もその信条に従って行動していた、という事実である。アーレントは、子どもが引き受けた「犠牲」の信条を「理解できていなかった」ことをエリスンに伝えた。ユダヤ人という彼女の出自と、奴隷の歴史を持つ黒人たちの境遇という、抑圧された状況に生きる人種による社会の多数派に抵抗する姿勢は、画一化や順応主義に対する恐怖を抱いていた

50年代のアーレントにとって、彼女を力強く励ますものであったに違いない。アメリカという一つの国家は、相違と多様性を内包しながら、歴史的に統一性を保ってきたという事実を、リトルロックの経験は再度アーレントに明示したのだから。

一度は掲載を拒否された「リトルロック」の発表を通じてアーレントがどうしても主張しなければならないと感じたことは、何だったのだろうか。それは、リトルロック事件の政治的解決策の提示ではなかった。そうではなく、政治的闘争の最前線に立たされて個人の人格が危機に曝されている、一人の少女の存在を守ること、そして、共和制を構成する市民一人一人に対して、あなたたちは責任を果たすべきではなかったのか、なぜあなたたちは見て見ぬふりをすることができたのか、と問いかけることだったのかもしれない。

## 注

- 1) Steven Kasher, *The Civil Rights Movement: A Photographic History, 1954-68* (New York, London, Paris: Abbeville Press, 1996), 52-58; David Halberstam, *The Fifties* (New York: Villard Books, 1993), 667-98. 金子宣子訳『ザ・フィフティーズ(下)』(新潮社, 一九九七年), 三〇六-四三三頁。
- 2) Hannah Arendt, 'Reflection on Little Rock', *Dissent* 6, no. 1 (Winter 1959): 45-59. 後にこの記事は、アーレントの遺稿管理者であるジェローム・コーン編集の下、『責任と判断』に収録された。—— Hannah Arendt, *Responsibility and Judgment*, ed. Jerome Kohn (New York: Schocken Books, 2003). 中山元訳『責任と判断』(ちくま学芸文庫, 二〇一六年), 三五八-三九三頁。以後、基本的に『ディセント』の掲載ページと邦訳ページを併記する。
- 3) Arendt, 'Reflection on Little Rock', 45-46.
- 4) Norman Podhoretz, *Ex-Friends: Falling out with Allen Ginsberg, Lionel and Diana Trilling, Lillian Hellman, Hannah Arendt and Norman Mailer* (New York, London: Encounter Books, 2000), 139-52.
- 5) David Spitz, 'Politics and the Realms of Being', *Dissent* 6, no. 1 (Winter 1959): 56-65; Melvin Tumin, 'Pie in the Sky...', *Dissent* 6, no. 1 (Winter 1959): 65-71; 'Letters', *Dissent* 6 no. 2 (Spring 1959): 203-06.
- 6) Anne Norton, *Hart of Darkness: Africa and African Americans in the Writings of Hannah Arendt*, ed. Bonnie Honig, *Feminist Interpretations of Hannah Arendt* (Pennsylvania: Pennsylvania State University Press, 1995), 247-61; Kathryn T. Gines, *Hannah Arendt and the Negro Question* (Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 2014).
- 7) 矢野久美子『ハンナ・アーレント——「戦争の世紀」を生きた政治哲学者』(中公新書, 二〇一四年); Elisabeth Young-Bruhl, *Hannah Arendt: For Love of the World* (New Haven: Yale University Press, 2004). 荒川・原・本間・宮内訳『ハンナ・アーレント伝』(晶文社, 一九九九年).
- 8) Hannah Arendt, *The Origins of Totalitarianism* (New York: Meridian Press, 1959). 大久保・大島通義・大島おかり訳『全体主義の起源 1・2・3』(みすず書房, 一九七二—一九七四年).
- 9) Hannah Arendt, *The Human Condition* (Chicago: University of Chicago Press, 1958) 清水速雄訳『人間の条件』(ちくま書房, 一九九四年); Hannah Arendt, *Eichmann in Jerusalem: A Report on the Banality of Evil* (New York: Viking Press, 1963) 大久保和郎訳『イエルサレムのアイヒマン』(みすず書房, 一九六九年); Hannah Arendt, *The Life of the Mind*, ed. Mary McCarthy (New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1978) 佐藤和夫訳『精神の生活 上・下』(岩波書店, 一九九四年).
- 10) 川崎修『アレント 公共性の復権 現代思想の冒険者たち 17』(講談社, 一九九八年), 二四六頁。
- 11) Seyla Benhabib, *Situating the Self: Gender, Community, and Postmodernism in Contemporary Ethics* (New York: Routledge, 1992), 94.
- 12) Podhoretz, *Ex-Friends: Falling out with Allen Ginsberg, Lionel and Diana Trilling, Lillian Hellman, Hannah Arendt and Norman Mailer*.
- 13) *Ibid.*, 146.
- 14) Arendt, 'Reflection on Little Rock': 51. 邦訳, 三七八頁。
- 15) *Ibid.*, 49. 邦訳, 三七三—七四頁
- 16) Sidney Hook, "Democracy and Desegregation," *New Leader*, (April 21, 1958): 1-19. <http://palmm.digital.flvc.org/islandora/object/ucf%3A5097> —— これは、『ニューリーダー』誌の付録のパンフレットとして刊行されている。; Spitz, "Politics and the Realms of Being"; Tumin, "Pie in the Sky...".
- 17) Arendt, 'Reflection on Little Rock', 54. 邦訳, 三八四—八五頁。
- 18) *Ibid.*, 56. 邦訳, 三八八—八九頁。
- 19) 刊行に至るまでの経緯は以下を参照—— Young-Bruhl, *Hannah Arendt: For Love of the World*, 308-18; 'Letters'.
- 20) Podhoretz, *Ex-Friends: Falling out with Allen Ginsberg, Lionel and Diana Trilling, Lillian Hellman, Hannah Arendt and Norman Mailer*, 148.
- 21) Hook, 'Democracy and Desegregation'.
- 22) Arendt, 'Reflection on Little Rock', 45. 編集部のコメントは翻訳されていない。

- 23) Spitz, 'Politics and the Realms of Being'; Tumin, 'Pie in the Sky...'
- 24) Hannah Arendt, 'A Reply to Critics', *Dissent* 6 no. 2 (Spring 1959): 179-81; 'Letters'.
- 25) Norton, *Hart of Darkness: Africa and African Americans in the Writings of Hannah Arendt*.
- 26) Gines, *Hannah Arendt and the Negro Question*, 2.
- 27) *Ibid.*, 37.
- 28) Young-Bruehl, *Hannah Arendt: For Love of the World*, 311. 邦訳, 四一七頁.
- 29) Judith N. Shklar, 'Hannah Arendt as Pariah', *Partisan Review* no. 50 vol. 1 (Winter 1983): 64-77.
- 30) Seyla Benhabib, *The Reluctant Modernism of Hannah Arendt* (Thousand Oaks, London, New Delhi: SAGE Publications, 1996), 155.
- 31) James Bohman, 'The Moral Costs of Political Pluralism: The Dilemmas of Difference and Equality in Arendt's "Reflection on Little Rock"', in *Hannah Arendt: Twenty Years Later* (London, England: The MIT Press, 1997), 53-80; Richard H. King, 'Arendt, the Schools, and Civil Rights', in *Arendt and America* (Chicago and London: The University of Chicago Press, 2015), 175.
- 32) マーガレット・カノヴァン『アレント政治思想の再解釈』寺島俊穂・伊藤洋典訳 (未来社, 二〇〇四年), 三一二頁.
- 33) Arendt, 'Reflection on Little Rock': 46.
- 34) 前川玲子『亡命知識人たちのアメリカ』(世界思想社, 二〇一四年).
- 35) Maribel Morey, 'Reassessing Hannah Arendt's "Reflections on Little Rock" (1959)', *Law, Culture and the Humanities* 10, no. 1 (2014): 81-110, doi: 10.1177/1743872111423795.
- 36) Halberstam, *The Fifties*, 676. 邦訳, 三一五—一六頁.
- 37) Arendt, 'Reflection on Little Rock': 50. 邦訳, 三七四頁.
- 38) Arendt, 'A Reply to Critics': 179. 邦訳, 三五八頁.
- 39) Kasher, *The Civil Rights Movement: A Photographic History, 1954-68*, 53; Halberstam, *The Fifties*, 675. 邦訳, 三一五頁.
- 40) Arendt, *Responsibility and Judgment*. 中山元訳『責任と判断』の訳註 [2], 三九二頁.
- 41) Kasher, *The Civil Rights Movement: A Photographic History, 1954-68*, 54.
- 42) Arendt, *Responsibility and Judgment*. 中山元訳『責任と判断』の訳註 [2], 三九二頁. 『責任と判断』の写真の出典を, 当時の『ニューヨーク・タイムズ』と『ライフ』, 及び Kasher の *The Civil Rights Movement: A Photographic History, 1954-68* の写真集で調べたが, 同じものを見つけることはできなかった.
- 43) Young-Bruehl, *Hannah Arendt: For Love of the World*, 311. 邦訳, 四一七頁. ブルーエルは出典を記述していない. 1967年に『ライフ』に掲載されたリトルロック事件にまつわる記事と写真を調査したが, アーレントの記述に見合うような記事と写真を見つけることはできなかった. アーレントは, 1957年11月に『コメンタリー』に提出した時から「本文に手を加えていない」と主張しているために, リトルロック事件の記事と写真を掲載している. 1957年9月16日版, 9月23日版, 9月30日版, 10月7日版, 10月14日版, 10月21日版, 10月28日版, 11月4日版を確認した. なお, アーレントの発言は次のものを参照. — Arendt, "Reflections on Little Rock": 45. 引用箇所は邦訳されていない.
- 44) Morey, 'Reassessing Hannah Arendt's "Reflections on Little Rock" (1959)'. モーレーの指摘した写真は, 確かにリトルロック事件を代表する写真であり, 「全米中の新聞や雑誌に複製された」というアーレントの記述とは適合するが, その根拠は説明されていない.
- 45) Danielle Allen, 'Law's Necessary Forcefulness: Ralph Ellison vs. Hannah Arendt on the Battle of Little Rock', *Oklahoma City University Law Review* 26 (Fall 2001): 857-95; Gines, *Hannah Arendt and the Negro Question*, 14-20.
- 46) Clarence Dean, 'School Integration Begins in Charlotte With Near-Rioting', *The New York Times*, 5 September 1957, 1.
- 47) *Ibid.*, 20.
- 48) アーレントは「ニューヨーク・タイムズ」を購読していたようである. 例えば1961年に彼女がアイヒマン捕獲のニュースを知ったのは, 「ニューヨーク・タイムズ」の一面を通してであった——Young-Bruehl, *Hannah Arendt: For Love of the World*, 328. 邦訳, 四三七頁.
- 49) Gines, *Hannah Arendt and the Negro Question*, 16.
- 50) *Ibid.*, 18-19.
- 51) ギンズは, エドウィン・トンプキンス博士が白人ではなく黒人であるという史実を指摘している——*Ibid.*, 17.
- 52) Arendt, 'Reflection on Little Rock': 50; Arendt, 'A Reply to Critics': 179. 邦訳, 三五八, 三七四頁.
- 53) Dean, 'School Integration Begins in Charlotte With Near-Rioting', 20.
- 54) Benjamin Fine, 'Arkansas Troops Bar Negro Pupils; Governor Defiant', *The New York Times*, 5 September 1957, 20.
- 55) Arendt, 'Reflection on Little Rock': 50. 邦訳, 三七四頁.
- 56) Arendt, *Eichmann in Jerusalem: A Report on the Banality of Evil*.
- 57) Hannah Arendt, 'Arendt to Ellison', 29 July 1965, The Hannah Arendt Papers at the Library of Congress General, 1938-1976, n. d. —'E' miscellaneous—1963-1975 (Series: Correspondence File, 1938-1976, n. d.), [http://memory.loc.gov/cgi-bin/ampage?collId=mharendt\\_pub&fileName=02/020340/020340page.db&recNum=6&itemLink=/ammem/arendthtml/mharendtFolderP02.html&linkText=7](http://memory.loc.gov/cgi-bin/ampage?collId=mharendt_pub&fileName=02/020340/020340page.db&recNum=6&itemLink=/ammem/arendthtml/mharendtFolderP02.html&linkText=7).
- 58) Robert Penn Warren, *Who Speaks For the Negro?* (New York: Vintage, 1966), 325-26. 『見えない

- 人間』はその年の全米図書賞を受賞している。——Ralph Ellison, *Invisible Man* (New York: Penguin Books, 1993).
- 59) Hannah Arendt, 'We Refugee', in *The Jewish Writings*, ed. Jerome Kohn and H. Feldman Ron (New York: Schocken Books, 2007), 264-74.
- 60) Arendt, 'A Reply to Critics', 179. 邦訳, 三五九頁.
- 61) Ibid. 邦訳, 同頁.
- 62) Ibid., 180. 邦訳, 三六二頁.
- 63) Young-Bruehl, *Hannah Arendt: For Love of the World*, 311. 邦訳, 四一七頁; Benhabib, *The Reluctant Modernism of Hannah Arendt*, 155.
- 64) Warren, *Who Speaks For the Negro?*, 343-44.
- 65) Daisy Bates, *The Long Shadow of Little Rock: A Memoir* (Fayetteville: The University of Arkansas Press, 1986), 62.
- 66) Halberstam, *The Fifties*, 670. 邦訳, 三〇九頁.
- 67) Arendt, 'Arendt to Ellison'.
- 68) Ibid.
- 69) Ibid.
- 70) Hannah Arendt, 'The Jew as Pariah: A Hidden Tradition', in *The Jewish Writings* (New York: Schocken Books, 2007), 275-97. 齋藤・山田・金・矢野・大島訳『ユダヤ論集2 アイヒマン論争』(みすず書房, 二〇一三年), 五三-八五頁.

## Rethinking “Reflection on Little Rock” —— What Arendt Understood and Misunderstood on the Cultural Tradition of African Americans ——

Aya OGATA

Graduate School of Human and Environmental Studies,  
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

**Summary** This paper seeks to discuss what Hannah Arendt understood and misunderstood regarding “The Little Rock Crisis” of 1957 throughout her article titled “Reflection on Little Rock”. Many Researchers of Arendt have grappled with how to interpret this controversial article; one popular method has been to interpret it through a racial conflict. Another is to view through the lens of her German-Jewish experience. Yet another through her thoughts on Republicanism. Based on these previous interpretations, I will reexamine her article by using historical resources. First, I will identify the pictures and articles concerning Little Rock which Arendt mentioned and clarify what misconceptions she held when she wrote it. Then, I will focus on a private letter to Ralph Ellison, who was an African American intellectual, in order to interpret her intellectual starting-point. Through these analyses, I intend to examine what Arendt saw and insisted on “the Little Rock Crisis”.